

用水堰の「歴史研」発足

茅野 初会合で約束事や史実検証

江戸時代に開削された諏訪地方の農業用水路「堰」について改めて考える研究会が発足し、26日、茅野市の玉川地区コミュニティセンターで初会合があった。8人が参加。2人が基調報告をし、大河原堰（同市）が造られた当時から現在まで続いている約束事や堰の構造のほか、史実などを検証。引き続き全員で意見を交わした。（今井則幸）



用水路「堰」について改めて考える研究会メンバー＝茅野市の玉川地区コミュニティセンター

元大河原堰総代の五味省七（呼び掛け、前大河原堰理事長さん）（90）＝同市玉川菊沢＝が「の原田薫さん（83）＝同神の原」と共に発起人になった。玉川地区は堰の恩恵を受け稲作が盛んだが、後継者不足など、農業は岐路を迎えており、歴史ある用水路を継承できたらと「諏訪地方の用水堰の歴史研究会（略称・歴史研）」として発足した。

原田さんは、八ヶ岳西麓は湧水が少ない一方で蓼科山麓は湧水が豊富とした上で、坂本養川が大河原堰の開削に至るまでの歴史的背景などを説明。堰の幅は最上部が6尺（約1・8メートル）と決まっていることや、大河原堰には堰と平行した管理道路がないこと、現在になっても「漏水権」や「盗水権」があることなどが特徴とした。

五味さんは、西山からみた堰の計画図と養川堰といわれている完成図の二つの鳥瞰図を示して指摘。いずれも養

川の時代に作成されたものと見られるが、養川自身が絵図関係作業に直接関わったものではないとした。また、養川の人物像に迫り「養川は貢献しているが、養川を褒めすぎると問題が出てしまう」とした。

意見交換では、「養川が小学校の教科書（東京書籍）に載ったいきさつを知りたい」「養川が測量する際、夜間ちようちんを付けたというのは本当か」などという疑問も出されていた。

次回は来月18日
次回は3月18日午後2時から同センターで開く。原村の用水堰、大河原堰の定款・規約、大河原堰の鉄製とよについて報告がある予定。